

**京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書**

平成21年9月28日

財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 経済学研究科

職 名・学 年 博士課程3年

氏 名 倪 卉

事 業 区 分	平成21年度・中期派遣助成	
研 究 課 題 名	現代中国における蚕糸業及び蚕糸業産地の移動に関する研究	
受 入 機 関	中国系絹協会、広西大学農学院、広西蚕業技術指導站、浙江大学 など	
渡 航 期 間	平成21年6月7日 ~ 平成21年8月31日	
成 果 の 概 要	タイトルは「成果の概要/報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 無 有()	
会 計 報 告	交付を受けた助成金額	700,000円
	使用した助成金額	700,000円
	返納すべき助成金額	0円
	助成金の使途内訳 (使用旅費の内容)	航空賃 104,600
		鉄道、バス賃 44,800
		宿泊料 199,300
		日当 348,300
査証手数料 3,000		

調査成果の概要

経済学研究科博士課程 3 年 倪 卉

今年の 3 月に貴財団の中期派遣助成を受け、2009 年 6 月 7 日から 8 月 31 日の 3 ヶ月の間、中国の蚕糸業発展状況とりわけ、主要生産地域の移動状況の解明をテーマにした現地調査を行った。本調査では、中国の北京市から出発し、蚕糸業地域移動のルートを通りつつ、広西壮族自治区の南寧市、賓陽県、上林県、横県、そして浙江省の杭州市、湖州市、淳安県、江蘇省の蘇州市、最後に上海市の二市三省に渡って、中国蚕糸業における蚕糸製品の生産プロセスから流通、貿易、さらに発展の歴史背景まで全面的な調査を遂行した。本調査は養蚕業、製糸業関連企業、政府部門及び協会、養蚕農家への訪問、担当者に対する聞き取り調査、そしてデータ、資料収集など調査手法を用いて、中国蚕糸業の発展状況をより透徹な分析のための資料を獲得することができた。よって、蚕糸業の産地移動そしてそれに伴う農業と工業間の生産構造の変化、農村社会の変化の研究の空白を補填することができると思われる。

訪問先の都合による変更や、調査の進行状況によりやむをえない計画変更と調整もあったが、調査はほぼ計画通りに順調に進めることができた。

簡単な調査過程は以下のようなものである。

2009 年 6 月 7 日の早朝、関西空港から出発し、午後、中国北京市に到着した。

従来 6 月 4 日に出発する予定だったが、新型インフルエンザの影響で、中国の入国規制と自主謹慎規制が厳しくなったため、中国に到着後、現地で迎えに来てもらえる週末の 7 日変更せざるを得なかった。北京に到着後、自主謹慎生活を送りつつ、北京での訪問、聞き取り調査そして広西や浙江や上海に連絡を取り、広西や浙江省へ向う準備をした。

その後、中国シルク協会や中国絹織紡績連合会などへの訪問、秘書長や統計担当の方々に対し、聞き取り調査を行った。そして、国家図書館で政策法令、概観データ資料の収集も行なった。

6 月 18 日北京をあとにし、南方になる広西壮族自治区の南寧市へ向かった。

広西では、広西大学を拠点に、農学院蚕桑学専門家の屈先生のもとで調査を展開した。資料収集のほか、私は屈先生の研究グループとともに数回に渡って、上林県及び賓陽県の幾つかの農家を訪問し、農家に対する聞き取り調査を行った。

さらに、南寧では、政府部門である広西養蚕技術の研究開発部門である蚕業技術指導総局に通っていた。そこでは、養蚕業及び桑の栽培に対する関与状況を了解し、広西全区のデータ、及びマクロ的発展状況を詳しく調査することができた。

蚕糸業の流通状況を把握するため、南寧市にある「中国繭糸原料大宗市場」という繭と生糸の取引市場を数回訪問し、とても貴重な流通データと聞き取り調査を獲得で

きた。南寧市では、広西系綢公司という生糸とシルク製品の貿易会社にも訪問ができ、シルク産業全体的な状況がある程度了解することができた。

2007年調査の続きとして、7月8日、9日に、広西の主要養蚕地である南寧市横県での再訪問もでき、09年と07年の二回の調査資料を合わせ、より動的なデータを入手することができた。

7月14日に、南寧を出発し、電車ではるか1900キロを離れている浙江省杭州市へ向かった。翌日、7月15日の午後、杭州に到着した。

杭州では、まず浙江大学動物学院蚕学院と浙江系綢協会の呉先生、黄先生を訪問することにした。そこは2005年ごろ調査のときに訪問したところである。再び以前を世話になった方々との再会ができた。さらに、約4年間過ぎた現在の浙江省の養蚕業の変化に関する貴重な資料を入手できた。

7月21日から浙江大学経済学院の顧先生のもとへと移った。翌日、浙江省大学の校門前の道で皆既日食を体験した。それから杭州滞在の間、顧先生の紹介で、浙江省農業庁経済作物局の養蚕を担当している局長を訪問したり、統計担当の方から統計データを頂いたりすることができた。

杭州では、私は顧先生が主催した中国蚕糸業発展の研究会に誘われた。研究会に参加し、中国国内において、蚕糸業研究は如何なる方向で展開されているのかを勉強することもできた。

数日後、杭州近辺にある主要産地である湖州市へ迎えた。そこで、蚕業技術指導站を訪問し、站長や副站長、そして農民技術指導を担当している技術員の方とも聞き取り調査を行った。そして、湖州市の養蚕農家にも訪問した。

浙江省における契約農業の生産方式を調査するために、契約農業生産方式で養蚕業を展開する淳安地域を訪問することにした。顧先生と農業局の方の紹介を頂いて、7月26日から杭州を離れ、浙江省西部にある淳安县に向かった。

再び杭州に戻り、先生方たちから、浙江省や江蘇省は広西と違って、長年養蚕経験を持つ伝統のある養蚕地域であるため、現代状況のみでは研究の深みがなく、その歴史的根源を探らなければとのお話を伺い、資料収集のため、日本ではない養蚕資料豊富の近くの上海市にある上海資料館での資料収集することを計画した。

その後、以前知り合った先生に上海復旦大学で開催される中国経済研究会にお誘いいただいたので、研究会に参加するため、予定より少し早く上海に向った。

上海では、復旦大学の歴史研究の先生から資料収集のアドバイスをいただいて、資料館での資料検索を行なった。そこで、蚕糸業資料の目録を作成し、近代及び現在の蚕糸業生産状況に関する資料を収集することができた。

上海近辺にある浙江省嘉興市の繭生糸シルク交易市场への訪問も計画したが、事情があって担当者の方と連絡が取れなくなり、訪問を断念せざるを得なかったことがと

でも残念だと思う。

8月20日、上海を離れ、北京へ戻った。そこで、日本に戻る前の準備をしつつ、調査資料を整理し、補足データの収集及び今後調査の依頼も行った。

9月1日、午前1時前の夜中に、京都に戻ってきた。

今回の調査は、私が一人で旅をしながら、一人で各地の担当者と連絡をとり、調査を遂行したことである。調査を行う86日間の日々では、中国の約3分の1の地域を通過し、合計で8,000キロ近くの距離を旅した。飛行機、汽車、バス、モータバイク、自転車などなど、現地では利用可能なさまざまな交通工具を利用した。中国の最も発展している大都市から、比較的貧困な深い山村部にも潜り込んで、比較的後進の西南部地域から高度発展した東沿岸部まで、自分自身で中国の地域格差、経済格差を痛感した。

調査中では、政府の官僚から、大学の研究者、工場の労働者、農民、商人まで、北京の中央政府から最も底にある地方の村の村民委員会まで、調査で訪問した、出会った人々は数え切れない。ここで、協力してくださった方々にもお礼を申し上げたい。

一方で、私のように、3ヵ月間の時間をかけ、中国蚕糸業の新興産地から伝統産地まで産業から、政府や組織、文化と地理状況まで全面的な現地調査は、中国においても日本においても類のない研究であるともいえる。同時に、私はこの調査を通じて、調査者本人が中国人であるという便利が調査遂行のかなり重要な条件であることも改めて実感した。

無論、今回の調査で中国蚕糸業研究に莫大かつ貴重な資料を収集することはできた。その上、今回の調査資料と2005年、2007年の調査資料をあわせて、中国蚕糸業のみならず、中国農業と農村社会そして中国経済を研究するにも重大な意味を持つ独自性の高い研究となると確信している。

今回調査のこの僅か3ヶ月間の経験は私にとって、一人の研究者として一生忘れられない貴重な研究経験である。

最後に、京都大学教育研究振興財団の中期派遣助成を受けなければ、今回の調査は不可能である。ここで、深くお礼を申し上げたい。